伝道活動の一番はじめの頃は、原語である英語でそのまま歌うということはあったと思いますが、いつまでもそういうわけにはいかない。やはり現地にキリスト教が根づいたという証拠、あるいは根づかせるためには、日本の場合ですと讃美歌をどうしても日本語で歌わなければいけない、そういうことが起こってきます。そこで英語の讃美歌を日本語に翻訳して歌わせる。そしてある程度その翻訳が集まった時に日本語の讃美歌集として出版する。こういう形になるわけです。

――なるほど。歌詞を日本語に翻訳することで日本語の讃美歌集が出来るわけですね。ある意味ではそれは音楽の教科書ですね。その教科書によってキリスト教信者は讃美歌を覚えていく。そういう経過になるわけですね。

全くその通り、そのように考えてもらっていいと思います。

§12　宣教師は歌が上手だったのか

――よく分かりました。キリスト教の布教にとっては讃美歌を教えるという教育活動が重要であった、ということですね。だったら、宣教師は歌も得意でなければなりませんね。実際そうだったのですか。

中にはね、日本の場合でも、もともと音楽の得意な宣教師もいました。でもそのような宣教師は歌を歌いに来たのか伝道に来たのか、と揶揄されるようなこともあっ

・人間についての幅広い知識
・自分の能力についての安定した、辛抱強い、一貫して謙虚な確信
・尽きることのない忍耐
・魂の価値の自覚
・温和な態度
・意志堅固
・仕事が好きであること
・良心的で、勤勉で、信心深いこと
・活動的で、注意深く、時間に几帳面であること
・健康であること
・独身
・どんな仕事もすすんですること
・よい歌手であること、ただし高級な曲でなかったり、歌唱がうまくいかなかったとき、やる気を無くす原因にならないように好みにうるさくないこと

たようですから、音楽の得意な宣教師はどちらかと言うと例外だったのでしょう。西洋の歌を歌ったことのない、聞いたこともない人たちに教えたのですから、とりあえずはそう専門的な音楽技量がなくても最初のうちはなんとかやれたのでしょうね。

その辺りを伝道団自体がどう考えていたのか調べてみたことがあります。『ミッショナリーヘラルド』という宣教雑誌の一八二四年十二月号にある記事に、ハワイの宣教師に向けた宣教師の伝道資格が書き出してあります。それによると宣教師は、人間についての幅広い知識を持ち、強固、忍耐強く、几帳面であるべきである、という書き出しで、音楽については、よい歌手であること、ただしあまり高い趣味は持たない事、なぜならそのような趣味は、歌唱がうまくいかなかったり、高級な曲ではない時に感情を害する原因になるから、と述べています。

つまりよい宣教師の資格として歌がうまい事を条件にあげていますが、専門的な歌手では困る、というのです。これを読むとなんだか音楽大学であまりに専門を学びすぎて小学校か中学校に赴任した先生が、生徒の下手さ加減に苛々している光景が浮かんできませんか。伝道団も同じことを恐れたのでしょうね。

実際に讃美歌を教えることを担当したのは、宣教師の奥さんだったよ

うです。西洋音楽など全く聴いたこともない人たちが相手ですから、専門の音楽家でなくても、少し上手にオルガンが弾けて、良い声で歌を上手に歌えれば、当時は充分に音楽教育が可能だったと思いますし、実際、効果を上げたようです。

――そうすると、讃美歌の普及に貢献したのは宣教師夫人だったのですか？

ええ、宣教の初期の時代ではそうでした。でもある時期から讃美歌の普及にとってとても重要な出来事が伝道団内部で起こってきます。ちょっと長くなりますが、それについてお話しさせて下さい。

――ええ、どうぞ。

少し専門的な話になってきますが。さっきの宣教師の条件にあった「よい歌手であること、ただしあまり高い趣味は持たない事」からも分かりますが、伝道団は当初、讃美歌の現地での人気を予想出来ていなかったようです。一方現地の宣教師は宣教をはじめてみると讃美歌がとても人気があることに気づき、そしてじきにかなりの専門技量がないと対応出来ない事態が生じることになります。

アジア太平洋の伝道が成功し、その成功に讃美歌が貢献していることと関係して、ある新しい出来事がキリスト教海外伝道団の内部に起こります。それは女性宣教師、昔は婦人宣教師と呼んでいたんですけど（婦人という言葉が最近では好まれないので、女性宣教師という名前で呼ばれることが多いのです）、女性宣教師の登場です。先に結論を言いますと、讃美歌が太平洋の広い地域に普及し浸透していくことと女

アメリカ女性宣教団一覧

女性宣教師派遣団体	母教会	成立年	日本伝道
Woman's Union Missionary Society of America	超教派	1861	1871
Women's Board of Mission of the Interior	Congregation	1868	
Women's Board of Missions	Congregation	1868	1873
Woman's Foreign Missionary Society	Methodist Episcopal Church	1869	1874
Ladies' Board of Mission, Presbyterian Church, New York	Presbyterian	1870	1873
The Woman's Presbyterian Board of Missions of the Northwest	Presbyterian	1870	
Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church	Presbyterian	1870	1873
Women's Baptist Missionary Society, the Eastern	Baptist	1871	1875
Women's Baptist Missionary Society, the Western	Baptist	1871	
The woma's Auxiliary to the Board of Missions	Protestant Episcopal Church in the U.S.A.	1873	1875?
The Woma's Board of Foreign Missions of the Reformed Church in America	Reformed Church in America	1874	
Women's Board of Mission of the Pacific	Congregation	1875	1876
Woman's Missionary Society	Methodist Episcopal Church, South	1878	
Woman's Foreign Missionary Society	Methodist Protestant Church	1879	
Woman's Missionary Society of the Methodist Church, Canada	Canadian Methodists	1881	1882

性宣教師の登場とは密接に関係しています。

――先生は今、女性宣教師とおっしゃいましたが、それはどんな方なのですか？

そもそもですね、海外に行く宣教師は男性なんです。それも独身の男性ではなく、必ず妻を持った既婚者、妻帯者の男性が行くように規則で決められていました。これは規則ですので、独身では海外に伝道に行けません。もしも自分が海外伝道に行きたいと思った時に独身だった場合、出かける直前に慌てて結婚して、急いで赴任地に旅立つという例もあるくらいですから、もともとは妻を伴った男性が出かけていく仕事だったのです。妻はその男性の現地での伝道活動をサポートする、いわゆる内助の功を発揮するというか、そういう形だったのです。

――そういう仕組みになっていたんですね。

はい。ところがちょうど日本が明治維新を迎えた頃の話なのですが、西暦で言いますと一八六〇年代から一八七〇年代、その時期に急速に独身の女性が

宣教師として海外に行くという新しい動きが起こります。

――そうなんですか。独身男性は駄目だけど、独身女性はいいわけですか。

理由はともかくそうなんです。でも、最初は独身女性を海外に宣教師として派遣するなんてことは彼らにしてもとても考えられないことだったようです。

――危険だからですか？

恐らくそうでしょうね。彼らにとってはあんな未開な地に女性が一人で出かけていくというのはとっても危険なことで考えられないことだったのでしょう。それが日本の明治維新の頃から独身の女性が海外に伝道活動に行くという道が開かれます。面白いことに一旦この道が開かれると、この動きは急速に盛んになって、ある意味ではこの時期から海外伝道の一種の花形のような存在になったようにも見えます。

日本の場合で言いますと、女性宣教師の活躍が例えば関西では神戸女学院大学を作っていきます。そういうところでとても目立った活動になります。女性宣教師の場合、もともと女性の適格性もあると思うのですが、地道に現地の子どもたちを導いていく、地道に毎日こつこつと教育するという根気強さ、粘り強さというところで大きな力を発揮します。彼女たちの多くは簡単にオルガンが弾けて、簡単に讃美歌が歌えるということが多々ありました。この女性たちが現地の子どもたちを中心に讃美歌を丁寧に教えていきました。これによって讃美歌が広く普及し、浸透していったのです。

ですから私が今注目しているアジア太平洋地域の讃美歌の普及にとって、独身の女性宣教師の活躍が非常に大きなウエイトを占めている、そういう風に考えています。

§13　どんな人が宣教師になったのか

――それにしても当時は十九世紀ですから、全く風習も言語もいわゆる文化が全く違う地域に出かけて行って、全く別の宗教をその人たちに布教する、信じこませる、よくもそんな活動をと普段の私たちの生活からは考えられないのですが、その辺りはどうなんでしょうか。

もっともな疑問だと思います。私も自分の研究の必要からキリスト教海外伝道についていろいろ本を読んだり文献を調べたり、時には宣教師が書いた手紙を読んだりして、普通の人よりは知識があると思いますが、まだまだ分からないことだらけですね。表面的なことで言えば、そもそもキリスト教は、誕生直後から海外への布教とそれによって受けた迫害の歴史がずっと続いている宗教です。今で言うパレスチナで起こった新しい宗教はそこからギリシア世界、ローマ世界へと広がって行きます。それはキリストの弟子たちの伝道活動ですね。その時、根拠になったと言われている聖書の文句は「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」、マタイ二八・十九でした。（『新約聖書』日本聖書協会、以下同様）